St. Jordi's Day

愛する男性（あなた）に「本」を

四月二十三日は、スペイン・カタルーニャ地方に伝わる「サン・ジョルディの日」。同地方の守護神サン・ジョルディをたたえる日で、男性は女性に「花」を、女性は男性に「本」を贈る。愛と知性のシンボルを贈り合うこの習慣が、日本でも初めて今年紹介されることになった。日本カタルーニャ友好親善協会が行うもので、さてあなたは――。

赤いバラは「愛と勇気」のシンボル

サン・ジョルディはバラ　いまにも咲きほころぶ赤いバラ　サン・ジョルディはカタルーニャの守護神……とうたわれるサン・ジョルディの生いたちは、ほとんど知られていない実情だが、「ローマ皇帝ディオクレティアヌスがキリスト教徒を迫害した頃、ローマ軍の下士官だった彼は、殉教のために処刑された」といわれる（三〇三年のこと）。以来、彼の名声が広まり、十一～十二世紀には、騎士十字軍の守護神となった。悪竜のいけにえに差し出されることになった王女を助け、悪竜を退治した、という伝説が残っており、恋人たちの守護神ともなった。退治した悪竜の血が花の色として、赤いバラが「愛と勇気」のシンボルとされた。

サン・ジョルディの祭りが、バルセロナで制度化されたのは、一四二七年。十五世紀末には、カタルーニャ宮廷が「サン・ジョルディの祝日」を制定したが、その日が一般大衆の手に入ったのは、一八四〇年以降。その時から花―バラの祭りが始まり、愛する人にバラの花を贈るのが、習わしとなった。

セルバンテスの命日としても

今、この日のカタルーニャの街は、バラの香りがあふれ、人々でにぎわいをみせるが、本と結びつくようになったのは、いつごろからだろうか。スペインを代表する作家で、『ドンキホーテ』を著したミゲル・セルバンテス（一五四七～一六一六）が死んだのが四月二十三日。彼をしのぶ行事として「本の市」が毎年行われるようになり、その時から「バラ」「本」「サン・ジョルディ」が一緒になって祝われることになった、といわれている。この日が休日でなくても、人々は街に花を飾り、特別な日として楽しむ。

花と本による愛のメッセージ。この習慣が日本に根づくかどうかは、時間が必要だろう。しかし、国際交流が深まりつつある現代、新しい愛の表現として、考えてみる価値も。単に形式としてではなく、国際化をすすめる一つのインパクトとして作用することが、期待される。

スペイン発 〝愛伝説〟 日本着

きょう4月23日は「サン・ジョルディの日」

日本カタルーニャ友好親善協会理事
竹村亜希子さん

「サン・ジョルディの日を日本でも」と、その紹介に精力的な役割を果たしたのが、日本カタルーニャ友好親善協会理事の竹村亜希子さん。占いの易経の主宰者としても知られる竹村さんに、実現までのいきさつなどについて、語ってもらった。

――きっかけは、どういうことからですか。

「一昨年の暮れに、カタルーニャ地方に『本とバラの日』がある、とたまたま知人から聞きまして。この組み合わせは面白い、きれいだな、ぜひ日本に持ってきたい、今年四月には実現したい、とすぐに思ったのがきっかけです。実現するためには、本物のそれを見てこなければならないし、それには、きちっとした形をつくる必要があると、昨年一月に仲間たちで渡航を企画しました」

――日本カタルーニャ友好親善協会をつくり、まず、向こうとの友好を結ぼうということですね。

「ええ。で、昨年二月に協会の準備委員会として、カタルーニャへ行き、サン・ジョルディの日本実現を説明して回りました。観光局や商業省、文化局などいろいろ回ったのですが、いい話ですね、頑張って下さい、といわれるだけで。結局、最後に回った旅行局で努力してくれることになり、四月の本物の日にプジョール首相とも会え、協会も正式に発足しました」

――向こうで、サン・ジョルディの日を初めてご覧になった時、どんな印象でしたか。

「それは、きれいだなの一語に尽きます。絵になるのです。私が訪れたのは、バルセロナのランブランス通りにある本と花の市ですが、この日を心から待っている人たちでいっぱいです。こうした形の市は、カタルーニャ地方でもここバルセロナ郊外に二か所ある、と聞いています。恋人たちのお祭りになったのは十九世紀からですが、別に恋人同士だけには限らず、いろんな人とこの日にバラを、本を贈りあえば、ジョルディの守護があるよ、という感じですね、本当に」

日本でもぜひ習慣づけたい 〝愛のコミュニケーション〟

――そうした習慣を日本に紹介することを手始めに、協会としては、どんなことを考えているのですか。

「協会の最高顧問は、林屋永吉・前スペイン大使です。代表理事は、ユニーの西川俊男社長で、名誉顧問には、カタルーニャ地方自治体のマルタ首相夫人になっていただいています。同地方と日本との結びつきで、相互理解と友好、伝統文化の紹介、欧州と友愛の機会創造といった三つの活動をすすめていきたいと考えています」

――「サン・ジョルディの日」の受け止め方については。

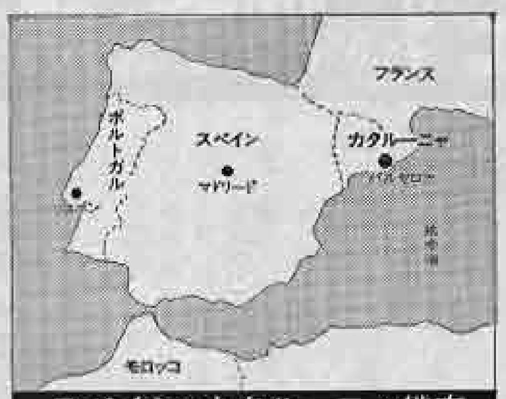
「向こうの習慣をこちらにも定着させたいということですが、本来は個人レベルの問題です。向こうでは、女性が男性に本を贈る場合、相手にふさわしい本を贈ることで、自分の人生観なりに合わせたものではありません。いわば、相手をどれだけ理解しているか、というメンタルテストなのです。ですから、イベントもさることながら、この日を愛のコミュニケーションを図る日として、とらえて欲しいですね。日本で例えてみるならバレンタインデーの習慣と同列に考えてもらっては困ります。

あとは、この日を機に現地へ旅するとか、そういう発展性を持たせると、それは個人の自由ですね。カタルーニャは、スペインの中でも特に自由な気風が強い所ですし、スペイン自体がそろそろ日本に近付いてきた、という時代ですから」

理解度測るメンタルテスト

愛する女性（あなた）に「花」を

その日、愛に染まるカタルーニャ



スペイン・カタルーニャ地方

独裁フランコ政権に抵抗し、戦い続けた二人のパブロ――画家のパブロ・ピカソ、今世紀最大のチェリストであるパブロ・カザルスやサルバドール・ダリ、そしてホアン・ミロ。さらに偉大な建築家アントニオ・ガウディ。彼の遺作「サグラダ・ファミリア」（聖家族教会）は、現在でも工事中。

その彼らを生んだのが、カタルーニャ。芸術の都と呼ばれるほど多くの芸術家を輩出している。カタルーニャのプロフィールを。

地形・気候　地中海に面したカタルーニャは、イベリア半島の東北部に位置し、スペイン全土の約六・三%に当たる三万二千平方キロの面積を有する。東京都の約十五倍、北海道の四分の一の広さで、ヘロナ、バルセロナ、レイダ、タラゴナの四県から成る。

地形的には、三千m級の山々を持つピレネー山脈地方、内陸部の高原地方、地中海沿いの海岸平地の三つから構成される。気候的には、ピレネー山脈地方を除き、冬は寒過ぎることもなく、夏も暑過ぎることもなく、イベリア半島では最も過ごしやすい。年間降雨量は八百ミリ。

人口　約六百万人。バルセロナの都心部に集中、バルセロナの人口は百七十五万人。全体での人口密度は、一平方キロ当たり約百九十二・三人。島根、高知県の密度とほぼ同じ。外国からの移住は、約四万人を数え、そのほとんどがヨーロッパ、南米、アフリカからとなっている。

政治　一九七六年、スペイン国内での地方自治権を獲得。自治政府が認められ、独自の自治憲章を持つ。スペインという国家の中で、独特の政治、社会、文化を持った一つの〝国家〟といえる。首相は「自治体首相」という呼び名で、J・プジョール氏が首相に就任している。

経済　スペインの中で最も経済的に恵まれ、平均所得は年間約六千九百ドル。通貨はペセタで、一ペセタは約一・五円（五十九年十二月現在）。

工業　紡織業を中心に十八世紀末、スペインで初めて産業革命を成しとげ、現在でもスペインの中心的工業地域。主な産物は、鉄鋼一六・七%をはじめ、織物一五・九%、化学一四・〇%など。

農業・牧畜　気候、土地などに恵まれ、農業は多様化。主な生産物は、穀物、豆類、ブドウ、オリーブなど。豚二百八十三万頭、羊七十三万頭、乳牛二十一万頭を保有するなど近年になって牧畜が急速に伸びている。

貿易　輸出は、バルセロナを中心にスペイン全土の約二一%を占める。鉄鋼、織物、化学が中心で、全体の約五五%。半数以上がフランス、イタリア、ドイツなど西ヨーロッパ諸国へ。輸入の大部分は、EC諸国やアメリカから。石化製品、自動車を主に。

言語　独自の言語「カタルーニャ語」がある。カタルーニャの大部分と隣接するバレンシアの北部などで、約七百万人が話している。公共の場でのカタルーニャ語使用が禁止された時代もあったが、一九五〇年以降緩和。現在はスペイン語との二重言語状態にある。

サン・ジョルディのふるさと